
遅れてきた王子

神崎みこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遅れてきた王子

【Nコード】

N0430Z

【作者名】

神崎みこ

【あらすじ】

高名な魔女の怪しい予言を振り回す迷惑で残念な王子と、それに付き合わされる有名な五人姉妹の見合い話。癖のある彼女たちとどこまでも残念な王子の見合いは成就するのか？

序(前書き)

Asymmetryというサイトからの移植改訂版となります

序

四つの大陸が海に浮かぶ世界にて、そのどれにも属さず、またほぼ中央に位置する島国は、長い間平和を謳歌した国家がその島を治めていた。

象徴的立場におかれた王は、尊敬される存在ではあるものの、彼女らを冗談とともに口の端にのせたとしても、笑いこそすれ咎められることはない、といった程度の扱いとなっている。その代わりに、その国の議会を運営する議院たちは非常に優秀であり、また出自によらず取り立てられる彼らは、国民皆の憧れの存在でもある。長い間他国に侵入されず、侵入しないこの国は、温暖な気候とあいまって、非常にのんびりとした国民性を有し、それはまた王家も同様な性質の人間で構成されていることを示している。王家の人間が思いつきで起す騒動は、人々の笑いや噂話の種となり、彼らは興味と尊敬と嘲笑を一手に引き受ける、道化、のような存在となりつつあった。

「このような娘はおらぬか！」

突然現れた若い男を、一同は胡乱げに見つめた。

一瞬にして自分に視線が集まったことに、男はたじろぎ、だが己の職務を思い出したのか、上ずった声で口上を述べる。

「殿下のお召しである。隠し立てするのためにならぬぞ」

精一杯虚勢を張ったその姿に、館の主は失笑で答える。

「まあ、隠し立てするほどのもんじゃないけど」

王家からの使者というのに、一向にひるんだ様子のない年かさの女は、男から渡された文書を一瞥する。

確かに、そこには彼女が思い当たる人物について尋ねる文言がしたためられている。

それを渡された彼女よりも若い女は、さらに冷めた目で男を見上げる。

彼女たちは今、家族そろつての食事ときである。

久しぶりに揃つた一族での晚餐を邪魔された格好となる彼らは、使者に全く敬意を払うようすもない。いや、一部にはご馳走を目の前にしてあからさまに敵意を持った視線を飛ばす人間もいるほどだ。

「偶然とはいえ一族が揃つているときにきたのは、神の思し召しなのかも」

全く神を信じていない女が、そう呟く。

「さつさと答えぬか」

「それよりも、ここまで通しちゃった警備の方がまずくない？お母様」

「それは、まあ、王家の紋章なんて、見たことがあるほうが少ないし。ともあれ処分は必要だな」

「どうせなら替えてしまえばよいのでは？役立たずは嫌いです」

「そう言うな、あれにはあれの言い分があるさ」

自分の言葉が全く聞こえていないかのような態度を見せ付けられ、男はさらに声を張り上げる。

「答えぬか！ええい、不敬罪で処分してくれるわ！」

その言葉に、ようやく最も年かさの、母と呼ばれた女が立ち上がり、男の側近くへと歩き出す。

「我が家を？四大陸にも我が家あり、と呼ばれるヴァイシイラ家の人間を？」

商売人らしく笑みを浮かべ、だが妙に迫力のある態度で言い募る。使者はたじろぎ、あとずさる。

「まあいい、使いの人間をいじめても仕方がない」

ごくり、と何かを飲み込み、使者は女の言葉を待つ。

「お尋ねの人物だが」

無言を重ねる使者に、さらに笑みを浮かべる。

「もうとつくに死んでいる」

だが、齎された衝撃的な言葉に、使者は思わず声をあらげる。

「ああ、うるさい。大声を出さなくとも聞こえている」

それを淡白にあしらい、彼女はなおも続ける。

「その髪色、顔かたち、おまけに名前。確かにそのものは我が家に居た」

「だったら、嘘などつかず、さっさと差し出すがいい」

「死んだと、言っただろう」

「そんなはずはない。それは紫の魔女の予言だ」

「紫の魔女、ねえ」

紫の魔女とは、好んで紫色の外套を纏っていた魔術師の女であり、力が台頭してきたころより王家に仕えていた人間だ。彼女は魔術師というよりも、神がかった予言を得意としており、それにより、この国が幾度も恩恵を受けていることは、子供でも知る事実である。だが、晩年は老化とともにその予言も不確かなものが増え、時間軸がずれた予言をしていたのは、ごく一部が知るところである。恐らく、使者がもたらしたその予言は、彼女の遺言ともいえるものだろう。魔女は死に、ご大層な葬儀が行われたばかりだ。

「謀ったところでもおもしろくもないだろう。商人は信用第一。嘘は身を滅ぼすだけではすまない」

彼女の迫力に、使者は口を開けない。

「あのな、その手配された女は、確かにこの家にいた。いや、この家を作った」

「だったら」

「黒髪が美しい、サユリ、という女は」

「そうだ、素直に出せばよい」

「私の母親だよ」

「は？」

「だから、サユリという女性は、私の母だし、彼女はもうとっくにこの世を去った」

「いや、だが」

信じようとはしない使者に、ヴァイシイラ家の面々は次々と自己紹

介をしていく。

サユリの長女、長男、次女、長女の娘たち、長男の息子と娘。そこまできて使者はようやく事態を把握した。

「サユリ嬢は、いない」

絶望とも思える顔をしながら、使者は急ぎ王宮へと帰っていった。取り残されたものたちはためいきをつき、一族をまとめる長女の合図で団欒を再会した。

珍しき黒髪を有したサユリという少女を娶れば、この国はまた一段と豊かなものになるだろう。

紫の魔女が遺したその予言は、王へ伝えられ、急ぎ跡取りである王子の手配のもと、予言された場所へ使者が送られた。

だが、晩年の魔女の予言は時間軸があやしかったことをどうしてだか知らなかった王子は、まだ見ぬ花嫁へ夢を募らせていた。

それが、ヴァイシイラ家が巻き込まれた騒動であり、この国に長きに渡って伝えられる笑い話の始まりであった。

長女・アベリアの場合

アベリアは祖父の代で築き上げた商家ヴァイシイラの跡取り娘であり、サユリの長女の長女にあたる。比較的男女差別のないこの国においても、女性が跡をとる、ということとは珍しい部類に入り、また、それがヴァイシイラ家ほどの規模ともなるとなおさらである。それは祖母がこの家に取り入れた思想によるところであり、能力のあるものが男女、生まれ順に問わず跡を継げばよい、ということがヴァイシイラ家の家訓ともなっているからである。

その点、アベリアは、非常に優秀な商人であり、また情にほだされないある程度冷酷な性格は、商家としてうってつけである。長子、ということ抜きにして考えても、その適正から彼女がヴァイシイラを継ぐことに異議を唱えるものはいない。

彼女は今日、王家からの呼び出しに肅々と応じ、控えの間にて待機中である。

高そうな装飾品に囲まれた部屋に萎縮してしまうものも多いなか、軽んじられているとはいえ王家からの招聘、という圧力をものともせず、アベリアは艶やかな笑顔を称え、ゆったりと椅子に座していた。

ことの起こりは、珍しく一族が揃った食事会の出来事に遡る。

王家の使いだ、という使者の尋ね人は、アベリアの祖母であった、というなんとの間抜けな話は、酒席での笑い話になりこそすれ、それを気にするものは一族の中には一人もいなかった。

それが、どういうわけか適齢の女性は全て王宮を訪ねてくること、という横暴ともいえる呼び出しがヴァイシイラ家にかかり、彼女はとりあえず、ということ様子伺いにやってきたのだ。

状況把握すらできずに、妹たちを危険な目にあわせるわけにはいかない。一家の長としての矜持が、彼女にここへ足を運ばせたのだ。半分以上好奇心、といったもので満たされているのだが。

呼び出しておいて散々待たせる王宮側にかすかな不快感を抱くものの、それを微塵もみせることなく、おっとりおよびやく呼び出された彼女はどこか別の部屋の扉をくぐる。

「顔を上げよ」

男の声でそう告げられ、彼女は華やかな面を男に向ける。

そこには、彼女が知りうる情報と合致する、王家の跡取り、第一王子がふんぞり返って座っていた。

「他のものは？」

「おいおいとまいりましょう。ヴァイシイラ家の跡取りとして、殿下にまずはご挨拶を」

形式的な挨拶をやりとりし、アベリアは笑顔を称えて王子を見据える。

「サユリという女がおまえの祖母だというのは確かなのだな」

尊敬すべき祖母を呼び捨てにされ、内心思うところはあるものの、アベリアは静かにその質問に答える。

「はい。確かに特徴を考えれば、祖母だと思われます。そのようなものは今ではヴァイシイラ家にはおりませんし。何よりその名前が祖母以外を指すとは思えません」

この国でサユリ、という名前は非常に珍しい。いや、いないといって差し支えない。

彼女はどこか遠くの国からやってきた、というのは誰もが知る事実ではあるが、その遠くの国、というのがこの世界のどこにもない国

であることを知るものはヴァイシイラ家の人間だけである。

ある日突然祖父の目の前に現れた少女は、まるでこの国の言語を解さず、また全てがこの大陸に育ったものとしてはありえない習慣、思考をもった女性であったことは、のろけ話として祖父に嫌というほど聞かされている。

「ところで、おまえは独身か？」

「いえ、夫がおりますが」

あっさりと答えたアベリアに、王子はあからさまに落胆する。

アベリアが、さっさと商人として優秀な男を婿ととったことは有名な話である。金持ちの美しい娘であるアベリアが結婚した際には、枕をぬらす男が両指の数では足りないほどいた、というのは笑い話ではあるが。

「そう、か。おまえならちようどよいと思っただが」

ここにきてようやく、アベリアは王子たちの狙いを確信した。

いや、薄々感づいてはいたが、よもやそれほどまで阿呆な理由で呼び出されたとは信じたくなかったのだ。

紫の魔女の予言、を成就させるべく、サユリの血縁を狙って縁談を持ち込もうなどとしている、とは。

予言などなくともこの国は議会が適切に運営しているし、所詮彼らはお飾りだ。

お飾りはそれらしく、それなりの嫁を娶ればよいのだ。

決して、アベリアのような見目はよくとも野心のある女を引き入れてはいけない。

アベリアは、王宮に入り込んだのち、他大陸にさらに支店を広げる夢を一瞬だけ計画し、この男と寝室を供にせねばならないことに気がついてしまい、わからないように頭を振る。

「私は失礼しても？」

「下がってよい」

顔もあわず、落胆したままの王子に退室を求められ、アベリアは大人しくそれに従う。

多忙を極める商人を呼び出し、数刻の時間を無駄にさせた王子は、その代償を美容、宝飾用品を売り倒したアベリアの商魂に払うこととなった。

「既婚とはおいしいことをした。私にふさわしい女だったのに」

アベリアが帰り際にせつせと商売活動をしている中、この国の世継ぎである王子は、アベリアの顔を思い出しながらためいきをついていた。

「何をとぼけたことをいつているんです。分不相応という言葉を感じなさい」

側に控える側近が顔色も変えずに言葉を挟む。

「あれが商人の出だとしても、側室ならば気にしないぞ」

「逆ですよ逆。あれほど優秀な女性がお飾りのほんくら王子に嫁ぐ意味がない。寝言は寝てからおっしゃってください」

言葉遣いは丁寧だが、辛らつな言葉を吐き出す側近は、才も家柄も十分ながら議会と王家、この残念な第一王子をつなぐ中間管理職の

ような立場に捨て置かれている。

この王家は確かに象徴として議会の上に君臨している。だが、代々の王たちはそこに大したくちばしを突っ込むことはせず、対外的に装飾品のように威厳をまとって存在すればよい、ということとを自覚している。慈善事業や文化活動には熱心で、その代わりに政治にはかなり疎い。

だが、この王子は中身が全く伴わないにも拘わらず、議会において権限をもつことをたくらんでいる迷惑な野心家だ。ことあることに余計なちよっかいをかけ議会を混乱させ、ひいては国民生活にまで迷惑をかける。それを解消すべく、あてがわれたのが側近であり、貧相な王子の隣で眉間に皺を寄せて立っている細身な彼である。政治家として優秀であり、なおかつ家柄の良い彼がこの位置に立ったのは、運が悪いとしかいいようがない。どれ程同情はしても誰も交代してはくれない役目なのだから。大きな子供の守をしているかのような毎日は、彼の眉間の皺を深くし、ため息の数を増やす。

「だいたい、側室はもういるでしょう?」

「・・・・・・あれは、まあ」

権力者の常として、女は必要だな、という単純な理由で、家柄の良い娘たちを娶ったはいいが、彼はその奥向きを一向に掌握していない。寵を競う、のではなく、己こそが一番だと勝手に競い合った妃たちの浪費は、目に余るものがあり、側近が手配したものである。清により一段落したものの、今だその火種は燻っている。彼は、数名居る側室を把握もせず、まとめることもできないくせに、紫の魔女の予言を頼ってまた馬鹿なことをしているのだ。

「あのばあさんがぼけてたのはご存知でしょう?」

時間軸のずれた予言は、全くあてになるものではなく、過去の出来

事であれば、それはただの歴史書の文言に他ならない。

「いや、そんなことはないぞ。私はあれを信用してある」

何を馬鹿なことを、という言葉を飲み込み、ただ深く息を吐き出す。

「だいたい、少し調査すればヴァイシイラ家ほどの人間はすぐわかりますでしょ？やり手の当主を呼び出して、何をしているのですか、何を。私ですらアベリアさまが結婚していたことは存じておりまして！」

「そんなことは一言も書いてなかったけどなあ」

王子はやけに薄い調査書に目を落とす。

「まあ、いいんですけどね」

あなたの気が紛れれば、という言葉をあえて黙し、側近は次の仕事へと王子をせきたてることにした。

次女・ダリアの場合

ヴァイシイラ家の次女ダリアは、一言で言えば非常に変人である。そんなことは、ある意味高名な彼女において、ほとんどの人間が既知のお約束である。

だが、王子に調査書を渡した人間は、面倒な、いや、基本的な調査すら嫌がったのか、そこには名前と年齢、職業しか記されていない。王子に時間を割く必要性を感じなかったのか、彼の好奇心を刺激したまま全てを側近へと丸投げしようとしたのか。どちらかといえば後者の可能性が高く、側近は王子が持つ限りなく薄い調査書を見下ろして眉間を押さえた。

複雑な事情や心情が絡みあってごった煮になっている状態にもかかわらず、それに気がつかないのは嬉しそうにダリアを見つめる馬鹿王子、だけである。なにせ、ダリアはその容姿だけは非常に温かみのある美貌を備え、黙っていれば人当たりの良い美人、で通ってしまうからだ。その錯覚も一呼吸する間もないほどの速さで壊されてしまうのだけれど。

「醜い口バ？」

やはり開口一番、ダリアは王子に向かってそう吐き出した。

確かに、王子はどちらかというところの草食動物であるところの口バ、に似た風貌をしてはいるが、それにわざわざ形容詞をつけて本人に告げる人間はいない。

「な！」

案の定、王子は盛大に引きつり、それに引き換えダリアは面倒くさそうな顔をしたままだ。

「何の用？」

全く敬意を払う様子のないダリアを、珍しいものを見るかのように眺め、王子が満足そうな顔をする。

「気に入った、おまえ側室になれ」

「断る」

最短で誘いを断ったダリアは、話は終わったとばかりに踵を返す。

「さて、さてさてさて。妃になれるのだぞ？」

振り返って胡乱げに王子を視線を合わせ、ダリアが口を開く。

「何の得が？」

「いや、王室に入れるのだぞ？」

「予算使い放題で、実験も研究もできるのか？」

「いえいえ、ダリア様、最近奥向きの予算は縮小傾向にあります」

指一本王子に触れさせず、なおかつ小手先の理屈で予算を使いたい放題するダリアの姿が容易に想像できてしまった側近は、慌てて突っ込みを入れる。

ダリアは、国の研究機関に所属する学者であり、魔術師である。

その稀有な能力は、非常に有効な薬や道具などを生み出しており、高額な資金が流用されてはいるが、費用対効果としては非常に満足できるものとなっている。その調子で奥向きで好き勝手されれば、その意味も効果もわかるうとはしないできの悪い側室たちが勢いづく、予算を寄せせと大騒ぎをするだろう。想像だけで気力が削がれたかのような側近が、王子の隣で頂垂れる。

「だったら何の得がある？」

「王子の妻になれるのだぞ？」

「それが？」

いくら政治的権限がないとはいえ、王家は王家である。

王子と言えば女の子の憧れであり、御伽噺の定番だ。それを一刀両断して切り捨てるダリアは、いささか情緒に欠ける部分があるといわざるを得ない。見た通り容姿や頭脳が残念だとしても、王子は王子だ。だからといって側近が同じ立場に立てば、同じ速度で拒否しているのは間違いないはずなのだ。

「時間の無駄。あんたのせいでどれだけのお金が無駄になったと思っている？」

ダリアは美しい顔を非常に不機嫌に歪ませ、王子を睨みつける。

時間と金を等価に扱うあたりは、さすがに商人一家の出身だけはある。

「おまえ、俺にそんな口を聞いても知らないからな」

『猿以下だな』

そのあとの猿に申し訳ないか、という呟きの前の聞きなれないダリアの言葉に、二人とも首をひねる。

その言葉は、この国の公用語でも方言でも、また彼らがしる他国の言語でもないからだ。

ダリアの祖母、サユリがどこか遠くの国からやってきたことは周知の事実ではある。しかし、サユリの祖国が、ここではないどこか、だと知る者はヴァイシイラ家の人間しかいない。当然異なった言葉を話し、当初は祖父が非常に苦労したということは、のろけ話と

もにダリアも知っている。

そのサユリの故国に興味を持ったのはダリアと、四女のセリであり、彼女たちはよく強請っては彼女の故郷のことを聞きだしていた。その中にはサユリの母語があり、その簡単で難しい言語にとりつかれたダリアとセリは、出来る限りの知識をサユリから引き継いだ。徐々に話せるようになると、母語で会話が出来ることを喜び、女騎士の秘密、と称して家族たちにもわからない秘密の言葉、サユリの母語で会話をすることが楽しみでもあったのだ。

今、あえてその言葉を使って悪口を吐き出したのは、理解されてはまずい、と思っただけではなく、ダリアが考えるところに、その言語が悪態について非常に豊富な語彙をもっているせいである。

彼女は改めて共通語を口にさせる。

「ばかだろ？おまえ」

彼女は言い捨てて、そのまま勝手に部屋を去っていった。

残された王子は、驚きに固まっており、側近はやはり深いため息をついた。

「あれは、あれはいったいどういう女なんだ！」

最初の印象が良かった分だけ、その落胆は大きかったようで、声を荒げ側近に怒鳴りつける。

「ダリア様でしたら、高名な学者でしょう。王子も随分とお世話になっっているはずですが」

「知らん！そんなものの世話にはなっておらん」

「王子はよく熱を出しますでしょう？そうしたら医師から熱さましの薬をもらいますでしょ？」

「あの魂がひっくり返りそうならい苦い薬のことか」

「それです。あれを作ったのが彼女ですよ」

「なんだと！あんなまずいものを世に出すだなんて、どれ程悪党なんだ」

「だからあなたは馬鹿なんですよ」

あっさりと言い切り、側近は懇々と説明を施す。

曰く、彼女によって開発された新しい熱さましは、害も与えず、確実に効くと評判の薬であり、それにより高熱によって齎される様々な後遺症も随分と軽減されたと評価されている。何よりその製法により、薬価が非常に安く抑えられ、庶民にも十分手の届くその薬は、まさに神の贈り物として広く愛されている。

それを、どういうわけか国家管理ではなく、ヴァイシイラ家が一手に取り仕切っているというのは、研究員たちがぼんくらだったせいでも、長姉アベリアが優秀すぎたせいでもあり、当時を思い出し側近は王子に八つ当たりをしたい気分が駆られる。

「それに大体ダリアさまの頭脳をあなたが御せるはずはないでしょう」

「お前も大概失礼なやつだな」

「正直なだけですよ、私は」

不毛な会話が繰り返され、側近はため息をつく。

王子は、これをいつまで続ける気だと。

側近の記憶が確かならば、あの有名な一家には五人の娘がいたはずだ。

すでに長女には体よくあしらわれ、次女には見下げられた。

残り三人の反応を想像して、側近は眉間に皺をよせた。

三女・ルクレアの場合

ヴァイシイラ家の三女ルクレアという女性を端的に言葉で表せば、いわゆる華のような人であった。

造作そのもので言えば、恐らく次女のほうがよほど整っている。だが、彼女には天性の花、というものがあり、纏った雰囲気は彼女を非常に華麗に見せていた。

優雅に一礼をした彼女を見て、王子はほう、と息を吐いた。

「美しいな」

正直な感想に、ルクレアは笑顔で答えた。

長女も大概笑顔ではあったが、側近に言わせればどう考えても商売用のそれであり、ルクレアの笑顔は心からのものと感じさせた。

「「ごよう」と、うかがいましたがあ」

だが、その話し方は、優雅な外見とは非常にかけ離れたものだった。後にねじがあれば回してやりたい、と誰もが思うほどゆっくりと間延びした話し方は、せっかちな人間がそろったヴァイシイラ家では珍しい部類だ。決して両親が教えたわけではないそれは、彼女の個性であり、特徴だ。実家ならば、彼女の考えを先回りし、最後まで話さなくとも用が足せる。それが結果として彼女ののんびりとした性格を悪化させたのだが、それで迷惑をこうむる人間はいない。だが、ここには明らかに頭の悪い王子しか存在せず、噂以上の彼女の様子に側近もただ見守るばかりだ。

「癒される。おまえ、おれの側室になれ」

「そくしつってー、なんですかあ？」

こういう性質の人間に癒されるのか、と納得した側近は、だがルクレアのあまりの返答に目を瞑る。

「俺の奥さんになれってことだ」

「おくさん？」

「そっだ」

だが、最初の心配をよそに、おっとりとしたルクレアと、頭脳がおっとりとした王子は非常に会話がかみ合うようで、一歩も進展しない内容をのんびりこつこつと交わしていく。

「なんで？」

「なんでって、おまえお妃さまになりたくはないのか？」

「それなに？」

「王子の奥さんのことだ」

「なんで？」

一向に進まない会話に痺れを切らした側近が、勤めて平静にルクレアに切り出す。

「つまり、この王子の奥さんになって、王宮で暮らして欲しい、と
いっているのです、これは」

「ええ？」

小首を傾げた様は、憎らしいほどかわいらしい。

王子がにやけた顔をしていると、当初から全く変わらない笑顔でルクレアが答える。

「お歌は？」

唐突に問われ、王子が答えに窮する。側近は、やはり王子に渡された調査書が限りなく手を抜かれたものであることを確信した。

ヴァイシイラ家のルクレアと聞いて何も思い浮かばないほど世俗離れした人間が、まさかいるとは思っていなかったのかもしれないが。

「おまえは歌が好きなのか」

「大好きい」

かみ合っていないようで、かみ合っていると王子に錯覚させる会話が続く。

「どういう歌が好きなんだ？」

「恋の歌とかあ、騎士さまの歌とかあ」

にこにことした顔をしてルクレアが答える。

どちらも酒場や劇場なので人気の演目となる題材だ、ルクレアがそれを答えたとしてなんら問題はない。

「では一曲歌ってみろ」

上機嫌でルクレアに命令をした王子は、だがあくまでにこやかに返される。

「料金は？」

一瞬だけ真剣な顔をして、すぐににこやかな顔に戻ったルクレアの言葉に王子が絶句する。

どこの世界に、王子の御前での命令に、報酬を要求する人間がいるのだと。

側近が固まった王子に代わり口を挟む。できれば何事もなく通り過ぎて欲しかったのだが、致し方がないだろう。

「ルクレアさま、申し訳ございません。王子は知らないようですの
で」

低姿勢な側近に、ルクレアは華やかな笑顔で答える。

「どこの世界にただで技術を売るバカがいるものですか、っておね
ーさまが言ってたのお」

アベリアの声をまねたルクレアのもの言いに、やはりアベリアの教育の賜物だったのだと、側近が引きつった頬をさする。

「その通りです。これにはよく言い聞かせておきますから、失礼を
お詫びします」

無理強いをすれば、一時は彼女の歌に聞き惚れることができるが、
法外な請求書が宮殿宛に届くに違いないことを確信する側近は、早
々に白旗をあげる。

「ま、まあよい、妃となって隣で歌っていればいいではないか」
「なぜ？」

そして最初の会話の繰り返しにはまりこみ、側近はやはり眉根を押
さえる。

「この人は宮殿に囲まれて、王子だけを相手に歌っている、とお願
いしているのですが」

側近の端的な説明にルクレアは小首を傾げる。何も考えていないような笑顔が一端ひっこみ、無表情となる。

「だれもお、聞いてくれないの?」

「はい、もちろんです」

「なんで?」

「つまり、王子のような仕事をしなくちゃいけないからです」

この王子がまともな仕事をしているはずはないものの、普通の王族はきちんとその役割を知り仕事をこなしている。その仕事の中に、国民に向かって歌う、などという項目は入ってはいない。

ようやく理解したのか、少し考えて嫌な顔をして、だがすぐに笑顔を持ってルクレアは返答する。

「いや」

「なぜだ!」

「だって歌えないもん」

「歌うのはかまわないと言っているだろう」

「みんなにー、みせれない、でしょ?」

王族が人前で歌う、ということはありえない。稀に神殿に下った王族が、神への賛歌を歌うことはあるが、そういう特殊な事情を説明する必要はないだろう。王子は、側室が欲しい、とわがままを言っているからだ。

「わたし、歌うの好き。だから嫌い」

そう言って、帰ろうとするルクレアを王子は引き止める。

だが、彼女の腕を掴もうとした王子の右手は、どういっわけか護衛騎士によって阻止された。

「失礼します、王子」

「無礼な！」

「ですが、王子、私はルクレアさまの歌を愛しております」

よくわからない言い訳をされ、王子は困惑する。

その隙にさっさとルクレアは部屋を出て行っており、のんびりした性質ながら、そういった瞬間を逃さないのはやはりヴァイシイラ家のものなのかもしれない。

「王子、彼女は街で有名な歌姫です。いくら王子でも彼女を民衆からとりあげたら、暴動がおきますよ？」

それほど、王家に威厳はない。

特にこの我がまま王子は国民に不人気だ。

頭がからっぽであったとしても、それを上回るほどの美貌があればまだよかったものの、そういったものは他の兄弟姉妹に吸い取られ、彼は非常に残念な容姿だ。おまけにこの傲慢な性格だ。全てが稚拙ゆえに、笑い話で片付けられてはいるが、周囲に少しでも頭の切れる人間がいて彼をそそのかせば、事態は非常に深刻なものとなるだろう。

もつとも、そうならないための側近、ではあるのだが。

よくわからないままの王子を取り残し、騎士すらルクレアを追って部屋には居ない。

側近はとりあえず、当たり障りのない書類を持ってこさせ、その日一日署名をさせることで、小さな鬱憤を晴らすことにした。

「お前も反対なのか？」

「ルクレアさまですか？」

「ああ、あれほど華やかなのは、隣にいてこそだと思わないか？」

「その分王子の貧弱さが強調されますが？」

ルクレアと並び立つ王子、を想像して正直に答える。

「おまけにあの乳ときたら」

ルクレアを特徴付けるものの一つに、その豊満な体が上げられる。

どちらかというと華奢なだけの姉二人に対し、その中にも豊かな胸を併せ持つ彼女は、童顔とあいまって非常に怪しい魅力すら称えている。

「それに結婚を何度も繰り返している人間は、さすがに王家が開かれていたとはいえ迎えいれるわけにはまいりません」

本当は、他のところに理由があるのだが、側近は敢えてわかり易い理由を説明する。

「はあ？あれはまだ若いだろうが」

この国の婚姻年齢は他国と比べ非常に高い。

それは温暖な気候と、緩やかな性格によるものだろうが、きわめて早く結婚する人間と、遅くする人間が同程度に存在するせい、でもある。女は結婚してこそ、といった風潮がないここでは、居心地の良い実家にいつまでも娘が居座ることを悪とはしない。いや、いつそ子供さえもつければ、嫁に行かずとも良い、と考える富裕層があるほどだ。

「しかも子持ち」

「は？はあああああああああああああ？」

王子の間抜けな絶叫が響く。

「一男二女」

「って、ほんとうなのか？」

「こんなことで嘘ついてどうするんですか。貴方をだましても何の得にもなりはしません」

呆れて言う側近の胸倉を掴みつつ、狼狽した王子はルクレアの笑顔と豊かな肢体を思い出す。
あれで子持ち。

糸が切れたかのように専用の椅子へへたり込む。

「報告書には記載されていなかったが」

「調べてないんですよ。そんなことは下町の猫でも知ってます」

ルクレアが結婚離婚を繰り返す恋多き女だ、ということとは有名な話だ。なにせあのヴァイシイラ家の美女、おまけに本人は誰をも虜にする声をもつ歌姫だ。知らない方がどうかしている。

やはり、王子が頼んだ文官は、何の調査もしていない、どこるかおもしろがって知っていることすら書いていないようだ。

「あきらめました？」

「………ああ」

書類を用意し、八つ当たりを開始した側近に王子の懲りない一言が投げつけられる。

「だが、まだ二人残っている！」

側近が書類を握る手に力が籠ったのも致し方がないことだろう。ちなみに、ルクレアが彼女を追っていた護衛騎士と三度目の結婚をするのはまた別の話。今度こそ家人に認められ、まっとうな婿として迎えられた彼は、その職業とは違って非常に波乱万丈な人生を送ることとなった。

四女・セリの場合

「お前本当にあの家の女か？地味ではないか」

間抜けな王子の非常識な一言に、呼び出された真実地味な容姿をした女は眉一つ動かさなかった。

あきらめもせずヴァイシイラ家の娘を呼びだしていた王子は、ようやく四女と対面することとなった。いかげんな調査書にも彼女の年齢程度は記しており、十以上若い彼女ならば容易に御することができるだろうと、第一王子は張り切っていた。

今までのヴァイシイラ家の娘たちは、趣こそ異なるものの、どれも美しくあり、まさかこのような造作の女が現れるとは思っていないかったのだ。だが、それにしても王子の一言は無粋であり無神経である。

「王子、鏡見てから物を言いなさい」

今まではあまり口出しをしなかった側近が、素早く辛らつな言葉を叩きつける。わずかに不快な顔をした王子は、それでもセリを不審な目でみることをやめない。

「それがあなたに何か関係があるのですか？」

全く動かない表情で淡々と言い募るセリは、二女と同じく高名な学者である。

次女程派手な分野ではないものの、彼女の緻密で統計学的な研究は、言語、歴史の分野において非常に高く評価されている。また、強い魔力をもち、精度の高い魔術を使うことでも有名だ。おそらく五人姉妹の中で、魔力としては最大のものを持っているだろう。それが、

外見と同じく、あまり目立たない方向に発揮される、というだけである。

「それに」

王子はセリのささやかな胸部を一瞥し、わざとらしくため息をついた。

ルクレアさえ見なければ、それがヴァイシイラ家の特徴のように、非常に慎ましかだからだ。

初対面にて、どういうわけかセリのことをよく思わない王子は、呼び出した側だというのにけんか腰で彼女に対応する。

「再度尋ねますが、それが何か関係あるのですか？」

丁寧だが、にこりもしない顔で言われると、迫力が増す。まして、彼女は不細工、というよりもはただひたすら地味な造りをしているだけであり、冷たい印象を与える彼女が勤めてそのように振舞えば、さらに冷酷さは増していくのだ。

ぐっと、室内の気温が下がったよう気がして、後に控える護衛騎士が無意識に腕をさする。

「私の時間を侵食するに匹敵するほど重要な案件があるのでしょうか」

馬鹿王子は相手にならぬ、と、セリは側近を静かに見つめる。怒りも憤りも、何も見せないその視線に側近がこらえながら笑みを作る。

「申し訳ございません。セリさまをお呼びすることだけは止めたのですが」

「あなたに他意はないのでしょうか。この茶番はなんのために設けら

れたのですか？」

側近には一定の敬意を示すセリに、面白くない王子は口を挟む。

「私の妻を選んでいるのだ。ありがたくおもえ！ヴァイシイラ家の人間から選んでやるのだから」

「姉は？」

こんな茶番劇を商売柄姉が認めるはずはない、と信じているセリは、長姉を指して口にする。それを正確に読み取った側近は、急増したヴァイシイラへの支払いを思い浮かべながら曖昧に笑い返す。

「申し訳ありません。国家太平のためには」

大仰だが真実を言い当てた理由を述べ、困った顔をさらに困らせる。つまるところは、くだらないことに第一王子が夢中でいればいるほど、国政が安泰なのですよ、と、言外に表し、それを十分汲み取ったセリは無言で頷く。妙にわかりあった二人のやり取りを気に入らない王子は、再び阿呆なことを口走る。

「お前でも良い、妻になれ」

ここにきてようやく片方の眉のみが反応したセリは、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「私はあなたの従弟と婚姻していますが？」

「そんな物好きが！」

絶句した失礼な王子に、だがセリは無表情を貫く。家族によれば、

これでも十分顔色を変えてはいるのだが、それを無神経な他人が汲み取るのは非常に困難だ。

「本当にその調査書、なんの役にも立ちませんねえ」

わかっていた側近は、薄い書類を持った王子に哀れんだ声を掛ける。もちろん、彼はセリが王子の血族と結婚していたことを知っている。そして、その従弟とは、王子が最も苦手とする優秀で美麗な男だということも。おまけに、彼の方がセリに惚れこんでセリたちの母親に頼み込み、本人をだまし討ちにして結婚にたどり着いたということも。

「この時間の間に、どれだけの本が読めると」

全くもって時間を無駄にされたセリは、静かに王子に問いかける。

「私の方こそ、時間の無駄だ！どいつもこいつも全く」

反省するはずもない王子は、セリに吐き付ける。

セリは黙って、一礼ししゃんと伸ばした背筋をそのままに、退室していった。

数日後、王子の下に華やかな装飾を施した筆記具が届けられた。出自がはっきりしないそれはどういいうわけか数々の関所を潜り抜け、王子の手に渡ることとなった。

そして、王子は数ヶ月間夜になると顔が青と赤のまだら模様となる呪いにかげられることとなった。

ヴァイシイラ家の四女が、言葉の専門家から派生して、膨大な魔力を利用して呪術師として有名なことは、この国で知らないものはない。

世継ぎの王子を除いて。

「セリさまを侮辱するのはやめていただきたい」

上の三人娘に対してはどこかひいた態度をしていた側近が、珍しくはつきりと王子に苦言を呈した。長女は利用し、次女は軽蔑し、三女は理解していなかったこのお見合いは、まじめなセリにとっては苦痛以外のなものでもないだろう、と。

「いやしかし、あれとあれとあれを見て、あれだぞ？」

そんなことを感じ取ることなど出来ない王子は、正直な感想を述べる。

恐らく、セリは生まれついてずっと王子の言葉と同じようなものを投げかけられていたのだろう。よく言えば冷静で、悪く言えば達観した性格は、そういった環境によるものなのだろう。

「セリさまは、セリさまで十分魅力的です」

だが、不特定多数に崇拜される姉たちとは違い、セリはある一定の層に非常に執着される傾向にある。それは、どういうわけか性格は破綻しているものの極めて知的で、なおかつ他者には非常に淡泊な男女、といった特徴をもった人間たちの層である。日常生活すらものぐさな彼らは、ひとたびセリが絡めば、執拗かつ妄信的に彼女に付きまとう、セリにとっては少々困った人たちでもある。

それにぴたりと当てはまっている側近は、この茶番を制止しなければいけない立場でありながら、彼女と言葉を交わしたくて見逃していた、という後ろ暗い事情がある。

そして、セリの配偶者、王子の従弟こそ、その偏執的な集団を独走する狂信者、の一人である。

そんなことは全く知らない王子は、三女の豊満な体でも思い出すのか、セリの悪口をあれこれいいたれ、側近の眉間の皺は最高潮に深くなっている。

「優秀な学者が外に流出するようなまねはやめてください、くれぐれも」

「だがなあ、失礼なやつだし」

「あなたのその空っぽでお飾りにもならない頭と違って、彼女は非常に優秀で繊細ですばらしい頭脳をもっているのです。役に立たないのならせめて足をひっぱらないようにしてください」

いつにもまして辛らつな側近の言葉に、さすがの王子もうな垂れる。

「それと、従弟殿とはローゼルさまですよ？いいんですか？そんな口を聞いて」

その名前を聞き、王子ははつきりと青ざめた。

年の近い従弟であるローゼルは、何かにつけ周囲が比較をする優秀な王子の一人だ。父親である王弟はどちらかといえば凡庸のだが、彼は突然変異のごとく非常に才能豊かな青年である。

王位継承権は低いものの、王子が継ぐぐらいならば彼の方が良い、と考える家臣は多い。

そしてなにより、このローゼルは人に興味がないくせに、会えばさりと嫌味を言う王子が苦手とする人間だ。学者王子と名高い彼に、悪気なく様々な実験という名のいたずらを施され、今では顔を見るのも嫌な状態となっている。

「……いくらあれでもここを盗聴はできないだろうな」

「さあ？ローゼルさまですから」

何の対策もとっていなかった部屋を見渡し、王子の顔がさらに青くなっていく。

基本的に人に興味がなくせに、執着した人間に対する執拗なまでの愛着と態度を思い出し、徐々に王子の口数が少なくなる。

「大丈夫だと言ってくれ」

「保障できかねます」

寒気がする、とってそのまま下がった王子は、後日呪いによって愉快な顔色とされてしまったが、さらに追い討ちをかけるように数ヶ月間不能となる呪いも合わせてかけられたことを知るのは数少ない。

そして、ローゼルもまたその妻と同じく、古代文字と呪術について非常に高名な学者であることは、井戸の中に住む蛙ですら知る事実である。

五女・ユツカの場合

「いいかげん、あきらめたらどうですか？」

「いいや、紫の魔女の予言は絶対だ。私はあきらめん」

頭をかきながら側近が捨て鉢気味に王子をたしなめ、全く懲りない王子はようやく五女を呼び出した。

ちなみに呪いはどういいうわけか夜に発現するため、昼間の王子はみかけ普通である。

「つーか、なんで私呼ばれてんの？」

まったくもって失礼な口を聞く少女は、ヴァイシイラ家の五女ユツカである。

彼女は今までの娘たちとは異なり、騎士服に身を包んでいる。

そう、彼女は国でも数少ない女性騎士の一人なのである。

ひよろりと高い背をまっすぐに伸ばし、中途半端な長さの髪は後ろで無造作に一つくくりとなっている。

姉たちよりも数段劣るが、それでも若さゆえかそれなりに愛らしい、と呼べる少女である。

「王子、ユツカですと犯罪ですよ。半分以下の年じゃないですか」

今年十六になったばかりのユツカは、あどけない顔で二人のやり取りをみつめる。上姉たちから何も聞いていないのか、何もわからないうにしている。おそらく、仕事の途中で無理やりつれてこられたのだろう。年若い彼女がそのような態度をとったところで、それを不敬である、と注意する人間はここにはいない。

「だから何なの？仕事があるんだけど」

ユツカは、騎士団に入団する前は冒険者として他大陸にすら名を馳せていた猛者だ。女だてらにその身体能力はすば抜けており、無意識的に魔力をめぐらせて体を補強しているのだろう、というのは彼女を研究した次女の言葉だ。ユツカ自身は、己に魔力があることなど自覚しておらず、切ろうと思ったから切った、飛ばうと思ったから飛んだ、という非常に単純な行動原理で体を動かしている。

それが、大の男を軽く凌駕する能力だというのが、騎士団に入団させられた理由の一つである。

「あー、おまえ私と結婚する気はあるか？」

「ないけど？」

あっさりとこんな小娘にまで振られ、王子は意気消沈する。

いくらなんでも年の差からして非常識ではあるが、今までのヴァイシイラ家の女をみれば、ユツカが一番普通に見え、微かに希望をもったあとだからなおさらである。

どうしてそのような意味不明に自信過剰なのかは、誰にもわからないのだが。

「側室にしてやるというのにどうしてそうあっさりと断るのだ」

「顔が嫌い」

「……」

「ひよろい体が嫌い」

王子は自らの両腕を見比べ、ためいきをつく。

「私、頭が悪いから、頭が悪いのをかけたらさらに悪い子供が出来

るのがいや」

一息に失礼な事を言われ、王子はがっくりと首を落とす。

頭脳がかわいらしい、と揶揄されることが多々ある王子ではあるが、すぐに忘れて回復するお目出度い思考回路ももっている。そんな王子ですら、どちらかという頭の悪そうな小娘に精一杯の指摘をされひどく傷ついた様子だ。恐らく、頭がよいとされている次女や四女に罵倒されるよりも、衝撃が大きかったのだろう。

「護衛の仕事があるんだけど？」

「誰の護衛をしているのだ？」

右手をひらひらさせ、退出を促しながら気まぐれに尋ねる。

「イリス王女ですけど？」

ユツカの一言に、王子は立ち上がり、そしてしりもちをついた。

ユツカはそれを一瞥し、くるりと背中をむけ去っていった。

「おまえ！それを知っていたのか？」

「知らないのは王子ぐらいですよ」

手を貸してくれた側近にしれっと言われ、王子が逆に彼の胸倉を掴む。

「おまえ、これが、これがばれたらー！」

「……………大変でしょうねえ」

「どうして止めない！」

「俺は寝る、病気だ急病だ」

「薬師を呼びましょうか？」

「いや、いらん」

「イリス王女、おもしろがるでしょうねえ」

イリス王女とは、彼の妹であり、非常に民に愛される王女である。美しい顔に、賢い眼差しは、誰もが夢見るお姫様そのものであり、本人もそれを意識して行動している節が見受けられる。

彼女は、全くもって愚鈍な兄を毛嫌いしており、それを態度に微塵も出さずに彼をいたぶる、といった特技をもっている。

幼い頃はどれだけ王子が言い募ったところで、人形のように愛らしい彼女がそのようなことをしたとは、誰も信用しなかった。

さすがに昨今は、彼女の二面性の仮面も近い中でははがれつつあり、王子の言葉に耳を傾ける人間もいるにはいるが、皆が皆、ただ聞くだけである。

イリス王女に苦言を呈そう、などという親切な家臣は一人もいない。

「王女のお気に入りだそうです」

「あれがか？」

「ええ、あれが、です。というよりヴァイシイラ家と懇意にしていますから」

今でこそ国一番の商家ではあるが、ヴァイシイラ家の歴史は浅い。

祖父の代では狭い土地に唯一つのものを売る、個人商店でしかなかったヴァイシイラは、彼が異国の少女と結婚したあたりから急激にその規模を広げた。

子供が生まれるたびに、商う品物が増え、それに見合う店舗を増やしていった。異国の娘の長女が継ぐころにはすでにこの国一番の商家となっていた。

だが、その成り立ちの新しさにより、歴史だけはやたらとある王家との関係は希薄だ。いや、希薄であった。

すでに老舗と呼ばれる御用達の店があるなか、新規参入していくの

は通例や慣習などがまかり通る世界ではなかなか難しい。

だが、図らずも孫娘の代で四女のセリが王子の一人と結婚し、また五女が国民に人気のある王女と親交を結ぶ、といった伝が出来た結果、ヴァイシイラは王家と取引もある商家として規模だけでなくその格まで高めていくことになった。

そして今度の騒動である。

馬鹿な王子の花嫁探しは、アベリアに商売の機会を与え、今まで不得意であった奥向きにまでその食指を伸ばしたようだ。

つまり、新しい花嫁、などという不穩分子を迎えたくはない側室たちの手先が、あからさまにうるつく中、それをどういった手管なのか捕獲し、洗脳し、商売の糸をくりつけたのだ。そのような手腕をもつアベリアが王家に野心をもって乗り込まなかったことを、側近は心の底から安堵している。

「しかし、まさかイリスの」

「あれだけ珍しい女性騎士が就任したというのに、知らないほうがどうかしてますよ。謁見の席に同席していたはずでしょ？」

「あんな平凡な女を覚えていくわけがないだろう」

そういった王子は、どういうわけか急激に寒気を感じた。

「風邪かな？」

「後ろ暗いからじゃないですか？」

「覚えはないな」

「イリス王女のお気に入りますからねえ、彼女」

わざとらしく咳まではじめ、王子はそわそわ落ち着かない様子で腰を浮かせようとしている。

「まさか、盗み聞きされている、などということはない」

「さあ？でも、ユツカは侍女や同僚の騎士たちにも人気がありますからねえ。気さくな人柄ですし」

王子は、控えている侍女や護衛騎士がにやり、と笑ったようにみえた。

「おまえたち！ここで話したことは他言無用だからな！」

「そんな口止めなどしなくとも、ユツカが個人的に話せばばれることでしょう」

「いい！今日は休みだ！病気だ！」

癩癩を起した王子は、とても病気だとは思えない勢いで寝室に閉じこもった。

親切な側近は、寝室の扉に「本日急病」としたためた札をかけておくことを忘れなかった。

それを見た人々は、口々に安堵の言葉をもらし、側近に感謝の言葉をかけたとかかけなかったとか。

次の日から、王子は寝具がどういいうわけか水で濡れ、この年でおねしょをしている、と下女たちに噂され、また、大切に扱っていた自慢の馬が小奇麗な雌のロバに取り替えられており、そのロバで国民の前にでなくてはならなかったり、格好をつけて登場したところ、大衆の面前で下穿きがずり落ちるといったような小さな嫌なことが積み重なることとなった。

それが全てイリス王女の仕業なのかを知るものはいない。

ただ、彼のその姿をみたイリス王女の顔が、今まで見たこともないほど晴れやかな笑顔だったことは、皆の知るところである。

おまけ

「そういえば、独身女性はもう一人いますが、いかがなさいます？」
いいかげん諦めた、とは思えない王子に側近がようやく新しい情報を与えた。

全ての情報を先回りして知っていたのだから、ヴァイシイラ家のことを考えれば防げた茶番ではある。しかし、王子が予言に勝手に振り回されている間、国政は非常に円滑に進んでいたことを考えれば、側近の仕事としては褒められるべき沈黙である。また、ヴァイシイラ家の商売にとっても結果として悪い話ではなかったせいなのか、側近は呪いも嫌がらせも受けることはなく現在に至る。

「まだいるのか。六女か？」

「いえ、まさか、ユツカより若いのを紹介するわけがないでしょう。叔母ですよ、叔母」

「おば？」

「ええ、アベリア様たちの母親の妹に当たる方が、まだ独身だと伺っております」

「なんだ、ばばあか！」

そついい切った王子に、護衛と侍女があからさまに一步後ずさり、また側近はあらぬ方向に視線を走らせ、王子と目を合わせないようにした。

「なんだなんだ、おまえたちのその態度は。事実じゃないか」

「王子より若いですよ、あその姉妹は少し年の差がありますから」

「だがなあ、三十越えは必死だろう？今更そのようにとうが立った女を娶ったところで」

「王子、私は一切何もいつていませんからね。事実を申し述べただけですよ、事実を。ヴァイシイラ家にはまだ独身女性がいる、という事実を！」

切羽詰った側近の物言いに、王子は首をかしげる。

緊張感に包まれた側仕えのものたちと反比例するように、王子はどこまでも暢気な態度のままだ。

「非常に言いにくいのですが」

「なんだ」

襟を正し、側近は王子から少し離れて口を開く。

「そのヴァイシイラの女性は、帰らずの森の魔女スミレさまなのですが」

「な！」

王子は絶句し、椅子の上で腰を抜かした。

沈黙に支配された部屋では、侍女が職場を放棄したそんな顔色をし、騎士の額には嫌な汗が浮かんでいる。

帰らずの森、というのは何の変哲もないただの森に住居を構えたスミレが、寄ってくる人の多さに辟易し、様々な畏を仕掛けた結果、そう呼ばれることになってしまった哀れな森の別称だ。

畏には致死性のものはないのだが、どちらかというと作者の性格が悪い、と評されるものが多い。

紫の魔女の後継者と目されている彼女は、人と接することを極端に嫌い、森で優雅に隠遁生活をおくっている。

その姿を認識したものはなく、魔術師、という奇異な存在に対する神秘性がいまって、彼女の噂は巷ではありえないものとなって跋扈している。

今では、言うことを聞かない子供たちに言い聞かせる存在として人々の口にする。

曰く、「言うことを聞かないと、帰らずの森の魔女に連れていかれるよ」と。

「私は何も言いません。知りません」

耳をふさぎ、静かに側近が首を振る。

「いやいやいや、あれは引きこもりだろう。まさか、ここまで」

「私は何も知りません、事実を申し上げただけです」

側近の声が徐々に小さくなっていき、いつのまにか王子の周囲には人がいなくなっていた。

護衛騎士ですら、扉近くに控えていなければいけないはずなのに、その背中はずっと遠いところにあるようだ。

「ちょっと、おまえら、仕事は！私を置いていくな！」

王子の絶叫がむなしく王宮に鳴り響く。

誰かの呪いと、誰かのいたずらに苦しむなか、王子は純粹に心労のため体調を崩すことが多くなった。

畏怖の象徴である魔女が、軽装でそのあたりをうろつろしているのは、ヴァイシイラ家に関連するものかしららない。そもそも顔を認識されているわけではない彼女が、どのような格好でうろつこうとも世間が騒ぐわけではないのだけれど。

こうして、遅れてきた王子の嫁とり大作戦はことごとく失敗に終わり、後にはおもしろおかしい笑い話の一つ出来ただけであった。ヴァイシイラ家はますます栄え、正反対に王子は徐々に貧相になっていった。

だが、政治に口を突っ込まなくなった王子は、国民に笑いを提供する存在として、国民から奇妙な愛され方をするようになった。

それが王位を継ぐとなった遠くて近い未来には、また別の騒動を披露することになるのだけだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0430z/>

遅れてきた王子

2011年12月14日18時45分発行